



竹田 英司

残業中に「竹田さん、頑張つて」と事務局の窓をたたく新井雄大選手。「たまには一緒に入りましょうよ」と風呂場から私を呼ぶ坂下純也選手。スパイクを打ち続けて息を切らす私の背に手を置きながら「大丈夫ですか」と、心配そうに顔を見つめてくる井上航選手。そんなありふれた日常風景が、間もなく私にとっては日常でなくなる。

唐突だが、私の退任が決まった。本音を言えば、社会情勢が

「日常」離れ 次の夢へ

落ち着いて、また以前のようににぎやかな試合会場で輝く選手と、思う存分「日常」を過ごしてから卒業したかった。退任に際しての私の秘めた心情は、岩国大会初戦（3月13日）前の陣で語った。

「みんな、私の故郷に来てくれてありがとう。われわれにとつてはVリーグ36試合の一つにすぎないが、この試合が最初で最後のバレー観戦という人もいるだろう。また春は別れの季節、来シーズンはここにいたくてもいられない選手やスタッフも存在するはずだ。だからその人たちのために、今日がバレーボール人生最後の試合だと思って死ぬ気で戦おう」

死ぬ気で戦ってくれたはずの航選手が大けがを負った、忘れたくても忘れられない試合だ。

夏からは隠岐諸島の西ノ島にある観光協会で働くので、島にいらしたらぜひ声を掛けていただきたい。私の次の夢はチームを招いて島でバレー教室を開催し、島の子どもたちを引率してJTサンダーズ広島の試合を観戦することだ。

（JT広島マネジャー）

チームバスで、選手たちと過ごしたかけがえのない「日常」

（筆者は最前列中央）